



坂の上から見た手這坂集落（上）と200年前に菅江翁の描いた手這坂風景画（下）



約200年前に訪れた菅江真澄が「桃源郷」と称賛した峰浜村の手這坂集落。3年前から無人となり、荒れ果てたこの菅葺き屋根4軒の集落を再生しようとして、共感する村内外の多くのボランティアが集まり、作業を通じて活用策を模索しています。

ボランティア主体の民家再生で交流の促進を（峰浜村）

菅江真澄が筆を取った
郷愁漂つロケーション

手這坂は、水沢ダムへと向かう村道脇にひっそりと佇む菅葺き屋根の民家4軒が並んだ昔ながらの山村集落です。周囲を山に囲まれた窪地に、蛇行する水沢川に沿って配置された田畑と家屋は、今となっては珍しい農山村の原風景をとどめています。

かつての情景に心打たれ、桃の花咲くこの地を4度も訪れたという江戸時代後期の紀行家・菅江真澄は、日記「おがらの滝」に手這坂を絵入りで紹介し、「ここに誰れ世々さく桃にかくろひておくゆかしげに栖（すめ）るひと村」と歌を詠みました。

驚くことに、菅江真澄の描いた200年前の手這坂の様子は、現在とほとんど変化がありません。開発の波を逃れ、古のままに残ったこの集落はそこに住んだ人々が代々大切に受け継いできた貴重な遺産と言えます。

しかしながら、村中心部から6kmほど山間部に入るこの集落は特に冬の交通の便が悪い等の理由で、家主たちは次第に里へ移り、3年前にはついに集落全体が無人化してしまいました。人の手から離れた農地は荒廃し、家屋も菅葺き屋根が朽ち始め、かつての



村唯一の萱葺き職人とボランティアによる修復作業

「桃源郷」の趣は失われつつありました。

荒廃集落の再生を

有志による研究会発足

世界自然遺産・白神山地に隣接する峰浜村では、白神の人氣が高まるにつれ、登山や自然観察など都市部を中心に県内外からの来訪者が増加する傾向にありました。

こうした状況にあつて、位置的にも好条件である手這坂を交流拠点とする可能性を探るため、村では平成13年3月に大学に依頼し、現地調査を行いました。資金面の見通しが付かず村による整備事業は採択されませんでした。が、活用策で話題となつたこともあり、所有者の親族の好意によつて1軒の屋根が補修され、この後、調査にあつた県立大短大部研究室の学生たちが草刈や片付けを行うようになつたほか、大掛かりな内部の補修は地元の大工組合が請け負つなど、ボランティアの輪が広がり始めました。

これらの事例により、集落の再生に向けた運営母体となる組織の必要性から、8月に地主をはじめ村職員・大学・

有志等で構成する「手這坂活用研究会」が発足しました。

ボランティアだから

できる発想と行動力

研究会の活動第1弾は、2軒目となる萱葺き屋根の修復です。朽ちた上に雑草が生えてしまつた集落のシンボルである萱葺き屋根は、地元の萱葺き職人の指導による講習会の形で修復を実施。その後は桃や果樹の植栽、遊休農地の整備と表向き、屋根補修のための草刈り、廃屋撤去、ホタルの水路整備、3軒目の補修、菜の花の種植えと、精力的に活動を展開してきました。

ボランティアを重視する研究会は、より楽しく活動に参加してもらう試みとして、14年4月から「は労働への対価としての地域通貨「桃源」を発行し、活動に伴つ手這坂での食事や宿泊に利用できるよう工夫しました。

また、遊休農地を活用した米作り「日曜農学校」を開校。田植えから稲刈りまでを、ボランティアのほか生徒・児童の農業体験にも活用しています。



日曜農学校での子供達による稲刈り作業。

宿泊施設としての試みも行われ、首都圏からの「森林ボランティア」や間伐に訪れた民間工コ団体への宿として家屋を提供し、参加者から好評を博したようです。

11月には初のイベント「手這坂桃源郷祭」を開催。収穫した米や麦、蕎麦を使ったパン作り・ソバ打ち体験、また、民俗芸能や楽器演奏、講演会などが行われ、多くの手這坂ファンを集めました。

研究会は今やアイディアの宝庫となつた感があります。

交流促進に向けた 手這坂の可能性

発足当時11名だった会員数も100名を超え、また、各種団体のほか、総合学習の一環として地元の小中学校も活動に関わるようになるなど、この2年でその規模は拡大し



たくさんの人々が集まった「手這坂桃源郷祭」

ました。また、この取り組みは国・県の支援事業に採択され、寄付金だけに頼る当面の資金問題を克服しています。

研究会ではボランティアの創意工夫で手這坂を後世に残すと同時に、奉仕活動を通じて内外の交流促進をも目標としています。村全体の活性化に対する波及効果の期待も含め、彼らの活動からは当分目が離せないようです。